

左腎摘出術を同時に施行した。

55. Inflammatory Pseudotumor の 2 例

鹿児島大放射線科 相良晃一
向井浩文, 村田 智, 田口正人
伊東祐治, 中條政敬

気管支原発の Inflammatory Pseudotumor は、稀な疾患であり報告例は少ない。今回我々は、内視鏡下腫瘍摘出にて、確診を得、その後のステロイド投与により、臨床経過良好な 1 例、及び内視鏡にて腫瘍を確認し、抗生剤、ステロイドの投与により、腫瘍消失し、臨床経過良好な 1 例、以上計 2 例の気管支原発の Inflammatory Pseudotumor を経験したので、若干の文献的考察を加えて、報告した。

56. 肺の pseudolymphoma の 2 例

産業医大第 2 外科 花桐武志
平塚昌文, 小田部裕之
野田祐司, 岡林 寛, 白日高歩
全州病院 陣内義文

肺炎様浸潤型陰影と結節型陰影を呈した肺の pseudolymphoma の 2 例を経験した。

その病理学的特徴は成熟リンパ球を主体とした細胞浸潤と胚中心の存在及び、肺門リンパ節に病変がない事である。肺原発悪性リンパ腫(小細胞型)との鑑別が問題となるが、免疫染色による細胞表面マーカーと細胞内グロブリンの単クローン性の否定が必要である。術後は、pre-malignant state として、現在経過観察を行っている。

57. 多彩な組織像を呈した Pulmonary blastoma の 1 切除例

国療南九州病院呼吸器科
廣津泰寛, 入来敦久, 岩見文行
脇本讓二, 福永秀智

75歳男。集検異常例(左上野小腫瘍影)。気管支鏡下生検で確診得られなかったが、CEA軽度高値もあり、肺癌を疑って左上葉切除、R_{2a} 施行。病巣はS^c胸膜直下に位置する 3.5×2.5×3.8cm の不整形白色充実性腫瘍で、周囲との境界明瞭(pT₂N₀M₀)。組織像は基本的に未熟な上皮性腺管と間葉系組織とから構成され(一部、腎芽細胞腫様)、前者で腺癌様の部分や扁平上皮への分化、後者で軟骨への分化が見られるなど多彩であったが、肺芽細胞腫と診断。

58. AFP 高値を示した肺癌肉腫の 1 例

国立嬉野病院内科 南野 淳
松瀬厚人, 新北浩樹
石黒美矢子, 神田哲郎
同 外科 吾妻康次

山下三千年
同 病理 藤本知洋, 井関充及
症例は69歳、男性。喫煙歴は20本50年間。平成2年8月の住民検診で左下肺野に異常陰影を指摘され入院した。入院時検査で左下葉横隔膜直上に約7cmの腫瘍を認め、血清 CEA 188.6 AFP 486.8 と高値を認めた。術前診断が得られないまま腫瘍の増大傾向を認めたため2月6日左下葉切除術を施行され、術後AFP, CEAは正常に戻った。摘出された腫瘍は腺癌成分と肉腫を示す部分が混在しており、いわゆる肺癌肉腫と診断された。

59. 原発性肺横紋筋肉腫と思われた肺癌肉腫の 1 例

済生会大牟田病院外科
末松 哲, 田中 保, 福田雅之
杉山正治, 平井 裕
久留米大第 1 病理 渡辺次郎
神代正道
症例は73歳男性。平成2年11

月頃より血痰および背部圧迫感を認めた為当院受診。胸部単純撮影にて右下肺野(S₆)に約6cm大の腫瘍陰影を認め、生検にて原発性肺癌の診断。右中下葉切除術を施行した。術後病理組織検査にて、PAP法等特殊染色、電顕的に原発性肺横紋筋肉腫像に混在して、cancer cellも認められ、肺癌肉腫と診断された。

今回、我々は本邦にて全肺癌中約0.3%と比較的希である肺癌肉腫の1症例を経験したので報告する。

60. 当院における肺癌患者の臨床的検討

健康保健課早総合病院

坂本 晃, 宮崎重幸, 小森清和
君野孝二, 武富勝郎, 飛永晃二
長崎大第 2 内科 岡三喜男
原 耕平

当院肺癌入院患者249人につき臨床的検討を行った。当院では検診発見例が多く、そのため肺野型腺癌の頻度が高く(51.8%)手術例も36.1%であった。術前診断困難な小結節影は画像診断での辺縁の不整、スピキュラの有無などが良悪の鑑別点と考えられたが、肺癌の可能性が否定できない例では積極的な開胸肺生検も必要と考えられた。また基礎疾患を有する高齢者の低肺機能症例では在宅酸素療法も適応と考えられた。

61. 当院における肺癌の現況

国立嬉野病院内科 松瀬厚人
石黒美矢子, 神田哲郎
同 外科 吾妻康次
山下三千年

当院において昭和60年から平成2年までの6年間に経験した原発性肺癌患者127例について検討した。当科における5年生存率は13.0%であり、MSTは5.7カ月であった。手術以外の